

魚類防疫に関する技術指導と研究

(魚介類安全対策事業)

松本洋典・清川智之・岡本 満・福井克也

1. 研究目的

海面及び内水面の魚病被害軽減と魚病のまん延防止のため、魚病検査や水産用医薬品の適正使用の指導及び養魚指導・相談を行なう。

2. 研究方法

種苗生産、中間育成、養殖場等の生産施設を巡回し、疾病の対処法や飼育方法の指導・助言を行うとともに、各生産施設や天然水域における疾病発生時には現地調査、魚病検査により診断を行った。検査方法は、主に外観および解剖による肉眼観察、検鏡観察、細菌分離、PCR 検査等により行った。細菌が分離された場合は、対処法および水産用医薬品の適正使用について指導を行った。

モニタリング調査として、ヒラメのクドア属粘液胞子虫症 (*Kudoa septempunctata*)、コイヘルペスウイルス (KHV) 病について、農林水産省ガイドラインおよび水産庁が作成した防止対策等に従って PCR による定期的な保菌検査を実施した。さらに、ヒラメのシュードモナス症について、種苗生産施設および中間育成施設において PCR による定期的な保菌検査を行った。

なお、KHV 病の養殖業者の定期検査については、令和元年7月以降は未発生水域のみを対象として行うこととしたため、今年度の検査はなかった。アユの冷水病およびエドワジエラ・イクタルリ症対策については、県外産種苗放流情報の収集と県内産人工種苗の保菌検査を実施した。

3. 結果

(1) 疾病発生状況

今年度の魚病診断件数は、海面1件、内水面10件の計11件であった。概要は次の通りである。

海面では、放流用種苗として入手されたクエ種苗の体表にびらんがみられたので検鏡したところ長桿菌が確認されたことから滑走細菌症と診断した。

内水面では、江の川水系出羽川から取水している養殖業者において、9月上～中旬にマゴイの斃死が確認された。KHV 病の PCR 検査で陽性が確認され、水産技術研究所での確定診断でも陽性となったため、移動禁止措置と殺処分がとられた。

江津市のアユ種苗生産施設の一部水槽において衰弱魚の腹部に不透明な膨満部が認められ、検鏡したところ菌糸状の構造物が確認された。水産技術研究所の診断により真菌 (*Pythium* sp.) の感染が死因とされた。

宍道湖自然館ゴビウスでは過去2年とも9月にアユの細菌性腎臓病が発生していたことから、本疾病を避けるために冷却温度を高め設定し飼育していたが9月にアユの魚病診断依頼があり、エロモナス症と診断した。本疾病は冷水病よりも高水温で発生することから、温度設定を高めたことが引き金になった可能性が示唆された。

その他、雲南市で養殖されているヤマメに冷水病 (PCR 検査により陽性) とキロドネラ症との混合感染が、江津市で養殖されているホンモロコにキロドネラ症が、雲南市の貯水池のマゴイにギロダクチルス症が確認された。

(2) モニタリング調査

ヒラメの県内の種苗生産、中間育成施設を対象に種苗搬出前 (4月) および放流前 (6月) において実施した PCR による保菌検査で、クドア症 (計180検体)、シュードモナス症 (計95検体) とともに全て陰性であることを確認した。

アユの冷水病およびエドワジエラ・イクタルリ症の保菌検査 (30件896尾) では、全て陰性であることを確認した。

なお、疾病発生・診断状況の詳細については添付資料に詳細を記載した。